

- イベント学会一大阪大会2000
～世界迎賓都市・OSAKAを築く～
開会挨拶／北本正孟 ————— 1
- ごあいさつ／磯村隆文・土崎敏夫 ——— 2
- 記念講演「21世紀の都市型イベント」
木村尚三郎 ————— 3
- オリピックフォーラム
「オリンピックは大阪に何をもちたすか」—4
- 特別講演「上方イベントロジー」
ジェフ・バーグランド ————— 7
- 基調講演「世界迎賓都市 OSAKA」
望月照彦 ————— 8
- パネルディスカッション
「世界迎賓都市 OSAKAを築く」——— 9
- どやねん街塾 ————— 12
- ミレニアムファンタジー／交流懇談会 13
- お知らせ ————— 14

イベント学会会報「イベントロジー」 No.7 / 2001.Feb.

イベント学会一大阪大会2000 ～世界迎賓都市・OSAKAを築く～

第3回イベント学会大会が2000年12月15日～16日の2日間にわたって大阪市で開催された。大阪市が目指しているのは「国際集客都市」。イベント学会では、その具体的な展開にあたって、大阪がもつシティホスピタリティに着目し、『迎賓都市・大阪』というコンセプトを提案した。



開会挨拶 大阪大会実行委員長 北本 正孟 氏

「イベントとはどんなものか」「イベントによる地域の活性化はどういう形でやればいいのか」。イベント学会大会は、そのようなことを地域の皆様方と膝をつき合わせてお話していこうではないかということを目指して開催しています。学会の学を「まなぶ」ではなく「楽＝楽しい」と解釈していただいてもいいかと思います。第3回大会は大阪になりましたが、元気な大阪というためには、「名物」「名所」「名人」の3つが必要です。「名物」「名所」はすでに沢山あります。我々は、これを契機に是非「イベント学会関西支部」を作り、「イベント名人」を輩出していただきたいと期待しています。

イベント学会一大阪大会2000プログラム

- 12月15日(金) 会場：IMPホール**
- 開会挨拶 (14:00～)
北本 正孟 大会実行委員長
 - 挨拶
土崎 敏夫 大阪市助役
 - 記念講演
「21世紀の都市型イベント」
木村 尚三郎 イベント学会会長／東京大学名誉教授
 - オリンピックフォーラム (15:00～17:00)
「オリンピックは大阪に何をもちたすか」
モデレーター 間宮 聡夫 順天堂大学教授
井原 敦 読売新聞社運動部次長
篠崎 由紀子 (株)都市生活研究所代表
原田 宗彦 大阪体育大学教授
山田 昇 大阪市オリンピック招致局長
 - イルミネーションツリー点灯 (17:30～) 大阪城公園
 - どやねん街塾 (18:00～20:00) IMPビル内飲食店
講師や学会員と市民が食事をしながら、21世紀の大阪について論じ合う

- 12月16日(土) 会場：IMPホール**
- 特別講演 (13:00～)
「上方イベントロジー」
ジェフ・バーグランド 帝塚山学院大学教授
日本の新しい「イベント創造都市・大阪」の魅力とパワーを語る
 - 基調講演 (14:00～)
「世界迎賓都市 OSAKA」
望月 照彦 多摩大学教授
「集客都市・大阪」の具体的な展開をもてなし心の「迎賓都市」として提案する
 - パネルディスカッション (15:00～17:00)
「世界迎賓都市 OSAKAを築く」
コーディネーター 谷口 正和 (株)ジャパンライフデザインシステムズ代表
パネリスト 井関 利明 千葉商科大学教授
貴多野 乃武次 阪南大学教授
橋爪 紳也 大阪市立大学助教授
マリ・クリスティーン 異文化コミュニケーション
 - 交流懇談会 (17:30～19:30)
大阪城公園西の丸庭園内・迎賓館

イベント千年宣言

- イベントは、地域と文化を持続させるエンジンである。
- イベントは、コミュニティの明日を創造する苗床である。
- イベントは、文明の変動を刻印するメルクマールである。
- イベントは、地球と人間のための最強のコミュニケーション メディアである。
- イベントは、人類の夢とロマンを実現させる自己変革のプロセスである。

ごあいさつ



大阪市長 **磯村 隆文氏**

大阪市では、ビジネスはもちろん、観光、イベント、コンベンションなど、内外から多くの人・もの・情報が集まり、新しい産業や文化を創造する活力に満ちた国際集客都市づくりを進めており、また、2008年オリンピック・パラリンピックの招致開催にも取り組んでおります。

こうした中、今年のイベント学会が大阪で開催され、集客都市大阪の魅力を発信できますことは、誠に意義深く、感謝いたしますとともに、イベント学会の成功を祈念いたします。

活力に満ちた国際集客都市を 目指して

大阪市助役
土崎 敏夫氏



「イベント学会—大阪大会2000」は大阪市の協力を得て開催。当日は、スイス・ローザンヌでのオリンピック招致演説のため欠席していた磯村隆文市長に代わり、土崎敏夫大阪市助役にお話をいただいた。

大阪市では、国際的なビジネス、観光、イベント、コンベンション、スポーツ競技大会など、内外から多くの人・もの・情報が集まり、新しい産業や文化を創造する活力に満ちた国際集客都市づくりを進めております。

市内には、歴史的な名所・旧跡とともに、飲食・ショッピング・文化・スポーツ・レジャーなど多彩な都市型観光資源があり、近年、海遊館をはじめ、大阪ドーム、キッズプラザ、フェスティバルゲートといった新しい集客施設が次々と開業しております。

加えて、本年4月には大阪国際会議場が完成し、来年は、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンがオープンし、東アジア競技大会が開かれ、また、韓国ソウルとともに世界観光機関第14回総会を開催するなど、21世紀の幕開けにあたり、大阪が国際集客都市として世界から注目され、さらに大きな飛躍発展を期す年となります。

こうした中、「世界迎賓都市・OSAKAを築く」をテーマとするイベント学会・大阪大会が開催されますことは誠に意義深く、北本実行委員長をはじめ、開

催に力を尽くされました関係の皆様方に深く敬意と感謝の意を表する次第であります。

本日は、記念講演とフォーラムのほか、「くいだおれ」や「イベント」などをテーマに、どやねん街塾を開催されますが、現在、大阪市内におきましても、大阪が誇る「食」の魅力を外にアピールする「食都大阪2000味の競宴」が開かれております。

この催しも3年目を迎え、参加店舗数も増え、飲食業界をはじめ集客産業の一層の振興発展を期しており、この機会に皆様方もぜひ、大阪の味を満喫していただきたいと存じます。

また、2008年オリンピックにつきましては、一昨日、スイスのローザンヌで開かれたIOC理事会において招致演説を行いましたとおり、来年7月の開催都市決定に向け、一層積極的に招致活動を展開しておりますので、皆様方のさらなるご支援をお願い申し上げます。

イベント学会の今後ますますのご発展と、皆様方のご健勝、ご多幸を心からお祈り申しあげまして、ごあいさついたします。

21世紀の都市型イベント

イベント学会会長／東京大学名誉教授／静岡文化芸術大学学長

木村 尚三郎氏

20世紀という「技術の時代」を終えた我々は、どのような生き方を求め、どのような都市を求めているのか。21世紀の都市型イベントの可能性と大阪への期待を、イベント学会会長の木村尚三郎氏が語った。



「IT革命」という名の下、インターネット関連産業が発展しています。しかし、このITが、かつて私達が車や新幹線、洗濯機や冷蔵庫と出会った時に匹敵する程、感動を与える新技術かという、若干異なる気がします。技術文明が成熟した現代では、人を感動させ、元気づけさせてくれる商品や技術が見あたらなくなっているのです。

大きな感動を与える新技術も無く、大きな思想やイデオロギーといったものも無い。そんな時代ですから、私達は「新技術に大きな期待を抱き、明日のために今日を生きる」という生き方から「明日は期待と不安が半々。それなら今日一日をしっかりと輝かせたい」という生き方へと変わりつつあります。例えば、今私達はモノによって幸せを得るのではなく、「いのちを作り育てる」ことに大きな驚きや喜び、幸せを感じるようになってきました。少し前、小さな液晶画面で仮想ペットを育てる「たまごっち」が売れ、切り花より種や球根から育てる「ガーデニング」が流行り、最近ロボット犬「アイボ」が人気を博しました。日々を大事に生きていくために寂しさを満たしてくれる「友達」が必要というわけです。20世紀のキーワードが「技術」だったとしたら、21世紀のキーワードは明らかに「いのち」といえるでしょう。

また、世界的に旅行ブームが起きているのも、買いたいモノが無いからです。人々が求めているのは「もっと面白い暮らし、生き方は無いか」「もっといのちを輝かせられないか」といった知恵です。ですから、今は、「良い住み方」をしている人がいる都市に、たくさんの方々が訪れる。今回、「世界迎賓都市」というタイトルを掲げさせていただいてますが、まさにこういう都市を指します。

例えば世界でもっとも人が集まるフランスには、昨年一年間だけで7100万人の外国人観光客が訪れました。フランス国民は5860万人しかおりませんので、国民の数よりも外国人観光客のほうが多いわけです。フランスではどの都市に行ってもその土地の美味しい食べ物と美味しいワインがある。それをよそ者も大いに楽しめる。美味しいものを食べて飲めば、おおらかに

になり、知らない人同士でも仲間になる。その上、歴史や文化にも富んでいるため、素晴らしい美術館や博物館もある。そんな都市は、当然のように人が集まり、繁栄するわけです。

フランスに次ぐ人気観光地となると2位がスペイン、3位が米国、4位がイタリアです。暖かく開放感がある明るい地中海に人が集まっています。世の中全体が閉塞状況にあるため、陽気さや明るい太陽を持つ海沿いの都市が好まれているわけです。

アジアで考えると、この自然の光に恵まれたのは南シナ海です。シンガポールや香港、バンコクには、国際会議その他のイベントが行われ、人が集まっています。当地大阪も関西国際空港を中心に再開発が進み「明るい海港都市」というイメージを打ち出しています。そのうえ、大阪は「食いだおれの街」というように、食べたり飲んだりして、皆仲良く集い楽しんでいる。まさしく世界に売っていくべき、「都市の魅力」を持つ、これから繁栄していく都市といえるのです。

大阪はまた、人と人との関係を築くのが上手く、商いの感覚に優れた街です。「商い」という言葉は英語でcommerce。「com」という言葉は、ラテン語の「cum」から来ており、英語では「with you」。つまり「あなたと共に幸せにならしましょう」というのが本當の商いの意味というわけです。この商いの感覚を、生産技術が成熟した今こそ掘り起こして盛り上げるべきです。

イベントというのは日本語で「事件」を意味します。楽しい事件、感動を呼ぶ事件を求め、私達は旅をし、買い物をしている。21世紀は、そのような意味では「都市の時代」であり、「商いの時代」でもあり、そして「イベントの時代」でもあります。そう考えると、大阪こそ、次代における私達の生き方の規範を提供できる地になるのではないかと、大いに期待しております。

オリンピックは大阪に何をもたらすか

2008年のオリンピック開催地の招致活動もいよいよ最終局面。候補地である大阪への期待が膨らむが、課題も多い。オリンピック開催地としての全体像から、その後の都市のあり方などを、4人のパネリストが語った。

- モデレーター 間宮 聡夫 順天堂大学教授 井原 敦 読売新聞社運動部次長
 篠崎 由紀子 (株)都市生活研究所代表 原田 宗彦 大阪体育大学教授
 山田 昇 大阪市オリンピック招致局長



間宮 聡夫氏

間宮 オリンピック開催都市の候補が5都市に絞られ、2001年7月にモスクワで行われるIOC総会で開催地が選ばれます。絞り込む過程の11の項目の書類審査では、パリ5、トロント4、北京2と各都市が一位となったが大阪は一項目も一位の評価を得られなかった。中でも残念だったのは、「開催国の市民や支援の盛り上がり」と「選手村の運営、報道、輸送、跡地利用など含めた開催概念」の二つの項目で、イスタンブールと並んで最下位だったことです。本日は大阪が開催地に選ばれることを前提に、その辺りの問題も含めて、オリンピックを開催するに際しての心掛け、期待について、お話ししたいと思っています。

原田 まず現在の招致活動についてお話ししておきますと、従来のようなIOC委員との会合や贈り物、日本への招待等の行為が一切禁止になり、IOCが認めた会議でのみプレゼンテーションを行うことになっています。そうした場で我々が強調しなくてはいけないのは、まずは光ファイバーの敷設率等、ハイテクのインフラ整備。それとシドニーが成功した一番大きな要因であるボランティア。さらに交通、安全、そして国と市民からの支持。こういった五つが重要になるでしょう。

井原 アトランタとシドニーの取材経験で実感したのは、オリンピックは、日本に伝わっているイメージよりも何十倍も壮大なイベントだということです。シドニーは300種目。その運営は大変なものです。アトランタは「民活五輪」、シドニーは「官製五輪」といわれていますが、私は民活と官製の間あたりの運営が21世紀の五輪のモデルになるのではないかと考えています。シドニーは、官が主導だったため、五輪テーマパークのような空間をつくりあげ、見事な運営を果たした。アトランタでは、オリンピックパークに敷き詰める煉瓦を一つ35ドルで販売し、買った人の名前を入れるといった市民の参加意識を高める工夫が随所にあった。それは民活の良さだと思います。

篠崎 私は市民の立場で「勝手連」という団体の

呼びかけ人をしておりますが、大阪オリンピックは市民がボランティアとして活躍してくれるオリンピックになるのではないかと考えております。先のなみはや国体では1万人を超える方々にボランティアとして登録していただきました。ただ、ボランティアの方々に活躍してもらうためにはボランティア・コーディネーター力が必要だと思います。来年の1月には民間のNPO主催ですが、大規模なボランティア・コーディネーター養成講座が開かれる予定です。「官」の方にボランティア・コーディネーター力をつけて頂き、「民」の力を、エネルギーを、大阪人の熱い思いを結集して頂ければ、素晴らしいスポーツ・ボランティアが大阪オリンピックで花開くのではないかと期待しております。

山田 都市経営を行う立場から申し上げますと、大阪は、1360年くらい前の「難波の宮」以来の歴史がある日本最古の歴史を持つ都市です。アジアの交易、交流の窓口でもありました。近世には商人の街として栄え、先の戦では廃墟になり、高度成長の過程で公害問題も発生しました。その都市が、再び、転換点を迎えています。今、大阪が目指しているのは人が集まる街。そこからいろんな活力が生まれます。経済活動も、文化振興も、国際化も重要です。大阪には、もともとその下地がある。ベイエリアは、かつては重厚長大産業が盛んでしたが、現在では人の集まる街が出来つつある。そのように、ハード、ソフト両面で将来の都市



山田 昇氏

経営を考え、それに近づきつつある中で、世界最大のイベント、オリンピックを開催するという事は非常に大きな意義を持つでしょう。オリンピックの招致活動を通じて市民

が自分たちの街にもっと関心や誇りを持つようになれば、大阪という街が市民参加型の都市、21世紀の理想の都市に近づいていくのではないかと考えています。もともと、大阪は町人文化の街ですから、町人といえますか、市民の活力でのオリンピック開催に、異論はありません。

間宮 それでは具体的には、どのような招致活動を行えばいいのでしょうか？

原田 現在のオリンピックは、良くも悪くも、勝利至上主義と商業主義に非常に色濃く染まっています。ですから大阪はその対極として、全人教育とか人類の平和と幸福を希求する、そういったオリ



原田 宗彦氏

ンピック・ムーブメントの原点に立ち返っていかねばならないと思います。また、大阪あるいは京都、奈良、神戸というオール関西の蓄積された文化をもっと表に出していかないといけない。文化としてのアイコンを表出し、大阪が有力な候補都市だという情報発信をする必要があると思います。

井原 私は、オリンピックの開催地としては、スポーツ文化の土壌という側面も大事なんじゃないかと思っています。その都市に連綿と続くスポーツ文化があって、だからこそオリンピックが開けるんだというようなアピールの方法もあるのではないのでしょうか。それと跡地利用を考えて、その都市のスポーツ文化の許容範囲のなかでオリンピックを開いて、オリンピックが終わってからもスポーツが続いていくということをアピールする。たとえば子供たちがいかにスポーツに親しんでいて、それがどのように未来につながっていくかということを出すのがいいのではないかと思います。

篠崎 オリンピック招致のための運動は決起大会のような一過性のものになりやすいんですが、現在、キッズ・ドリームという名称で子供たちにオリンピックの絵画とキャラクターを募集するコンテストや、高校生の応援団による定期的な街角のコンサートなど、いろんな催しを実施しています。「大阪一商店街一國運動」も立ちがりました。一商店街が一つの国を応援するというものです。こういった招致のための運動の最も根底にあるものは、大阪をスポーツ・パラダイスにしようというビジョンです。市民が日常的にスポーツに親しみ、また世界最高のスポーツを観戦する機会にあふれる、スポーツ文化の花ひらく都市づくりを旨とした、スポーツパラダイス構想のもとにオリンピックを招致しているわけです。

ボランティア育成の必要性

間宮 大阪にオリンピックを誘致し成功させるための要件は、市民からの支援体制とボランティアだというお話がありました。しかし欧米に比してボランティアの意義・使命が日本は定着していません。この点に関していかなる方策をお持ちでしょうか。

山田 ボランティアを育成するというのは非常に難しいんです。様々な国際競技大会でボランティアの方々が活躍しているのですが、どうしても活動が細切れになる。したがって、一つの競技会で終わらずに、ボランティアを続けていただく方策みたいなものをきっちりつくりあげないといけない。2008年に向けて、ボランティアの輪を広げていくことを考えていかなければ。

原田 たしかにボランティアを継続的にマネジメントするのは非常に難しい。綿密に戦略を練って時間をかけて育てていかないと、なかなかいいボランティアは集まらない。その意味で、4万8000人のボランティアを集めたシドニーはやっぱりすごいなと思っております。当地では支給されたユニフォームと帽子などのグッズにプレミアがつくほど、ボランティアが皆の憧れの的になった。そういったボランティアのマネジメントについては、シドニーから学ぶことが多いと思います。

井原 僕はアトランタとシドニーでボランティアの方々に大変お世話になったんですが、印象は随分違った。原点の部分、ホスピタリティーの気持ちは同じだと思いますが、トランスポーターションなどにトレーニングの差が出た。端的にいってシドニーのほうが良かったんですが、そのあたりが民活と官製の五輪の質の差という気がしますので、大阪の場合もそのトレーニング方法を確立していかないと大変だろうと思います。



井原 敦氏

スポーツ施設の跡地利用

間宮 施設をどのように建設し、その費用をどのようなかたちで回収していくのか。オリンピックあるいはスポーツ・イベントの跡地利用では、長野をはじめ2002年W杯の各地を含め運営に苦慮しております。大阪のオリンピック用地の跡地利用はどうなるのですか。

山田 大阪は、文化ホール、博物館、美術館など文化事業に力を入れておりますが、そのための公的資金の支出についてはあまり取り沙汰されないのに、なぜかスポーツ施設の管理運営の悪化は批判の対象になる。もちろん、管理運営上の効率化の努力はしなければいけないが、同時に、スポーツに対して税金を投入することへの市民の理解を

促すことも必要かもしれないと考えています。
原田 確かにスポーツ施設が自治体のお荷物にならないようにするにはなりません。スポーツ・マーケティングのアイデアを取り入れることによって、オリンピック施設を「遺跡」にせず「遺産」として十分に活用する方策はあると思います。大阪オリンピックがそういう意味での壮大な社会実験の場にもなるだろうと予想しております。

井原 跡地利用の一つに、ネーミング・ビジネスの方法論がある。要するにスタジアムの名前に企業名をかぶせて、その企業からスポンサー料をとるといふ、アメリカ流の方策です。それと、基本的なことですが、人々がスポーツに親しむように、行政にスポーツ政策をぜひやっていただきたい。たとえばJリーグの川淵三郎チェアマンは、小学校の校庭を芝生化する方策がスポーツを普及させる一番のやり方だという趣旨の発言をしている。怪我を心配せずに、子供のころから走ったり寝ころがったりできるからです。そういう視点を持たないと、スポーツ人口が育たず、オリンピック後の施設の跡地利用はおろか、スポーツの文化が途切れるのではないかと思います。

篠崎 大阪では現在、スポーツ・パラダイス構想にそって、各区にスポーツ・センターをつくり、そこを一般開放する日を設け、市民により一層スポーツに親しんでもらえる運営を心がけています。さらに今後地域ごとのスポーツ・クラブをつくり、大阪市民の日常的なスポーツ活動を盛んにしていこうという動きもあります。同時に指導者を養成して、地域でのスポーツ・イベントに育てればと考えています。オリンピック施設の跡地利用に関していえば、大きな施設をつくったら、それをうまく世界にセールスしていかなくてはならないでしょう。そのために、その施設の活用をバックアップするスポーツのプロモーション・ビューローのようなものをつくる必要があるのではないかと思います。

オリンピックと文化、芸術

間宮 オリンピックで忘れてはならないのは、ギリシアからの伝統である、芸術、文化との関連です。大阪オリンピックにおける文化、芸術の表現についてご意見をいただければと思います。

井原 開会式と閉会式についていえば、シドニー、アトランタ、パルセロナの三大会は、総合プロデューサーが同じ人物で、開催時間が長いのが特徴なんです。開会式の翌日や翌々日に試合を控えている選手は、そんなに長いことフィールドに立たされたら、当然、体調が狂いますから、たとえば柔ちゃんも開会式には出ていません。人文字などは、観客席からは分からない。結局テレビ用のシ

ョーだということですね。大阪の開会式のときはぜひ選手を主人公にした、テレビを観る人をそんなに意識しない、簡潔な開会式にしていだきたいなと思います。

山田 私は、シドニーの開会式はオーストラリアの歴史を様々なパフォーマンスで表現した素晴らしいものだったと思います。大阪の場合にも決してスポーツということだけでなく、新しい文化の創造を感じさせるようなものを工夫していかなければならない。オリンピックの期間中、あるいは前後を通じて大阪の文化的なものをどのように訴えていくか。実は、その基本テーマは、立候補ファイル、いわゆる開催計画に盛り込んでいかなくてはならないのです。今は、まだテーマを発表できないのは残念ですが。ただ、オリンピックはスポーツの一大祭典であると同時に世界最大級の祭りなので、大阪が「祭りだワッショイ」といった感じでオリンピックを意識できるよう打ち出していけば、大阪文化そのものにつながるのではないかと考えております。

篠崎 今の若い方には体育会的な鍛練を嫌う人もけっこういらっしゃる。でも、私設応援団のイベントを見ていると、そういう人たちもダンスとか音楽、アートといった切り口を通してオリンピックに思いを込めているし、若い方の動きが自然発生的にでてきているのも非常に面白いと思います。大阪オリンピックではスポーツだけではなく、文化の側面でもいろんなエネルギーが花開くのではないのでしょうか。

間宮 「スポーツ・パラダイス大阪構想」は、生涯のあらゆるステージにおいて市民一人ひとりが楽しみや生き甲斐を持てる、文化としてのスポーツが溢れる街という意味ですが、皆様のお話を伺ううちに、オリンピックの開催によって、その実現への気運が一気に盛り上がりそうだと確信いたしました。特に地元企業が大阪五輪を支援している姿を来年2月のIOC委員の現地調査時に、英字紙への広告出稿などを通して積極的にアピールすべきではないかと思います。本日はありがとうございました。



篠崎 由紀子氏



特別講演

上方イベントロジ

帝塚山学院大学教授

ジェフ・バーグランド氏

ありのままの姿を見せることが大阪におけるイベント成功の秘訣——。大阪人よりも大阪人的な発想を持つ、ジェフ・バーグランド氏が語る『上方イベントロジ』とは？



今年で在日31年になりますが……あ、見て分かると思います、僕ガイジンなんですよ（笑）。英語を教えている関係で、言語から物事を考えることが多いんですね。だから大阪の文化の中で僕が最も好きなのは「言葉遊び」なんです。大阪人の根本には、常に言葉遊びの感覚がある。よくいわれる「ボケとツッコミ」だけではなく、船場商人の古い言葉でも大阪にはおもしろい言葉遊びがたくさんあります。例えば、これご存じですか？

「儲かりまっか？」「いやあ、夏のハマグリや…」

夏のハマグリは「身（見）くさって、貝（買）くさらん」。見るだけで買わへんいうわけです（笑）。こうした言葉遊びを覚えて使うことで、僕は大阪の人とどんどん仲良くなっていった。大阪人は笑いによって人間関係を作りますから。新幹線で15分なのに私の住む京都とは全然違う。京都を歩いていても「あ、TV出てはる先生や」という声がチラと聞こえる程度。でも大阪は「オッ、TVの先生やんか。どっからくんねんな、そのおもしろさは。ま、一杯飲めか…」ですから（笑）。

大阪人は“ありのまま”を見せるのが得意

オリンピックのような大きなイベントを招致する時でも、こうした大阪独特の笑いの感覚や、人の温かさをアピールすべきだと思うんです。これからは、イベントに来てくださる方々と「どういう人間関係を作っていくのか」ということを重視して、企画していかなあかんだろうと思います。

自分の話になりますが、僕は31年前、同志社大学に留学生として来日しました。同時期に26人の留学生が来たんです。みんなどこかに下宿するわけですが、僕以外の友人の家は皆リフォームしてあった。ベッドにシャワーに暖房器具…、驚いたことに、週3回はステーキが出るというんです。

高度経済成長期の初めの頃やで。すき焼きのニオイがすると「あ、あの家、すき焼きやん！」という時代（笑）。一方の僕の下宿は布団やし、薪の風呂やし、毎日、味噌汁と魚とご飯。暖房器具なんて「電器スリッ

パ」でした。ご存じですか？ プラグ差し込んで電気を入れると足だけ暖かくなるヤツ。ハーて息したら真っ白や。部屋の中やで。友達と全然ちゃうやん！（笑）

でも誰が一番日本好きになったか？ 誰が一番日本人と仲良くなったか？ 誰が今も日本に住んでいるか？……僕やんか（笑）。友達はみんな帰ってしまいました。この差は、何でやと思います？ それは下宿のご家族が、飾らない、ありのままの姿で私を迎え入れてくれたからなんです。ありのまま接してくれたから、僕もどんどん日本に興味がわいたし、深い人間関係も築けた。

イベントも同じだと思うんです。これからは“ありのままの姿のイベント”が成功するんちゃうかなど。世界的なイベントを大阪に招致する時でも、肩肘張らない、ありのままの姿で世界の人を迎えましょうと。20世紀後半の大型イベント、特に行政主導のイベントは、ハコモノやプログラムばかり一生懸命考えて企画されてきました。いわばありのままを隠し、きれいなものしか見せないイベントです。確かに洗練されて誰も文句言えへんかもしれん。でも、それではおもしろくないんです。

また大きなイベントを成功させるには、ボランティアの協力が不可欠ですよ。肩肘張らずに世界の人たちを迎えられるとなれば、ボランティアも一緒にやりたいと思いますよ。「言葉が違う」とか「生活習慣が違うから無理や」ということは無いんですから。僕がそうやったわけやし。

そもそも大阪人には、ありのままの姿を人に見せる、構えてへん、といった長所がある。部長が目の前にいるのに「うちの部長はしゃあないヤツや……あ、部長おったんですか？ すんまへん」と自分でボケとツッコミを両方やるようなね（笑）。これ大阪独特の文化ですよ。これからのイベントは、そんな“ノリ”が基本になると思います。

世界迎賓都市 OSAKA

多摩大学教授

望月 照彦氏

魅力的な都市には、「お迎えの心」を持った「おもてなし産業」がある。独自の文化を育む大阪は、世界でたくいまれなる「迎賓都市」を目指すべきだ。



都市部の人口減少、地場産業の衰退、中心市街地の空洞化…。こうした背景から、今、大阪をはじめとした多くの都市が、「集客都市」という言葉の下で、街おこしに邁進しています。

しかし、21世紀の都市戦略には、客を集めるのではなく、心からもてなしする顧客起点の発想が大切です。そこでイベント学会では「迎賓都市」という言葉を使わせていただきました。心からお招きすることで、人をワクワクさせ、心安らぐ都市。ストレス社会といわれる現代には、そんな「タウン・セラピー」とでもいうべき、癒し効果のある都市にこそ人が集まるのではないかと考えたわけです。

世界には、こうした「迎賓都市」がいくつかあります。例えば、ドイツのロマンチック街道にあるローテンブルグ。城壁に囲まれた人口1万2000人程の小さな街ですが、年間300万人が訪れます。

この街のシュピタル門には「歩み寄るものに安らぎを、去りゆく人に幸せを」という言葉が刻まれていて、街全体が、まさにこの言葉を具現化しています。まず至る所に花が飾られ“花の街”が演出されている。また道行く人が皆笑顔で挨拶をし、中央広場ではボランティアの高齢者達が民族衣装を着て民謡を歌っている。こうした細やかな心遣いに訪れた誰もが感動するわけです。さらにローテンブルグのすごいところは、この歓待の気持ちがビジネスモデルとして定着していること。実は、街には100軒近い商店があるのですが、これが全てプレゼントを売る店なのです。すてきな“贈り物の街”としても成り立っているわけです。

もう一つの代表的な「迎賓都市」は、年間3000万人もの人を世界中から集めるラスベガスです。先述の「集客」という概念で言えば世界最大規模の集客都市といえるでしょう。この驚異的な集客力を支えている要素は大きく五つある。一つ目は、当然、カジノ産業という人を集める普遍的な産業インフラがあること。二つ目はセキュリティ。カジノ都市だからこそ、窃盗ひとつ起こさないというマネジメントが成されています。三つ目は、カジノ産業をサポートするサブビジネスが在ること。コンベンション産業やファミリーリゾート等、様々なサブビジネスがドラスティックに変

化しながら存在し、シナジー効果を産んでいます。四つ目は、都市運営がホテルオーナー等によって構成された民間NPOによってなされていること。五つ目は都市型起業家達の熾烈な競争により、常に新しいサービスが提供されていることです。

ローテンブルグとラスベガス。この二つの都市に共通することは、施設や交通機関等のハード面と共にソフト的なバックアップが整っていることです。そして、その根底には市民達の「お迎えの心」がある。この精神と手法が重要なのです。オリンピックでも博覧会でも、集客という発想しかないところに人は集まらない。いかに喜ばせ、「また来たい」と思っていたかという発想で、都市のビジネスを展開しなければなりません。つまり「おもてなし産業」を起こす必要があるのです。

そういう意味で、我々は大阪に小林一三という先達がいたことを忘れてはならないでしょう。彼は、イベントという手法で都市のマーチャンダイジングを図りました。例えば宝塚を作る前に、「婦人博覧会」等、女性を中心とした斬新なイベントを催し、都市文化を、地域を盛り上げました。

では、今の大阪が21世紀に目指すべき都市の形とはどんなものなのでしょう。大阪が持っている世界中の人々を惹きつけるもの。それは笑いであり、その裏にある泣きであり、つまり大阪文化が持つ“味(ペーソス)”ではないかと思うのです。そして、その魅力を最大限に引き出すのが、Administration = 行政、Business = 事業、Citizen = 市民、さらにDemocratic Organization = 民間組織で成り立つ「ABCDパートナーシップ」です。この相互協力があってこそ、訪れた人が、一時の感動ではなく永続的な魅力を感じてくれる「歓迎都市」が生まれるのです。

世界迎賓都市 OSAKAを築く

世界中から人々を集め、活気あふれる21世紀の大阪を目指して。パネルディスカッション「世界迎賓都市 OSAKAを築く」では、4人のパネリストがさまざまな観点から、大阪の集客の未来を討論した。

- コーディネーター 谷口 正和 (株)ジャパンライフシステムズ代表取締役社長
 ●パネリスト 井関 利明 千葉商科大学教授 貴多野 乃武次 阪南大学教授
 橋爪 紳也 大阪市立大学助教授 マリ・クリスティーヌ 異文化コミュニケーター

谷口 このパネルディスカッションでは、大阪が世界中から客を集める「世界迎賓都市」になるため、どんなことに着眼すべきか、討議していきたいと思えます。まずは、お一人ずつご意見を伺いたいのですが。

橋爪 江戸時代の大阪は、天下の台所と呼ばれた流通の拠点都市であり、各藩の屋敷や各種の市場があった場所でした。時間的に余裕のある人がたくさんいて、付加価値を生む都市だった。日本を代表する観光地でもあった。ところが以降、製造業に力を入れてから、街がすっかり変わり、滞在してつろぐ場所ではなくなった。観光したいと言われれば京都や奈良を勧めるし、せっかくもてなすことがあってもとりあえず北新地やミナミの歓楽街で済ませておく、といった感じでした。でも、これからは、繰り返し違う目的で来られるような街にするべきでしょう。考えてみれば、これまでの大阪人は、相手のニーズを考えずに自分本位で自慢ばかりしていた傾向がある。もてなす文化が十分ではなかったことが問題だったと思います。全国一律に「たこ焼き、阪神、吉本」といった大衆文化だけを自慢していた。それに対し、たとえば北海道は、台湾に次のようなアプローチをし、たくさん観光客を呼び込むことに成功しています。台湾の人は、普段雪を見ることはありません。そこで、北海道は台湾に「アジアの中の北欧」といったキャッチフレーズで売り込みました。こうして台湾から客を呼び込んだわけですから、大阪も、自分の魅力を相手はどう受け取るか考えつつ情報発信をなすべきだと思います。



橋爪 紳也氏



貴多野 乃武次氏

貴多野 私は、どうも大阪は東京を意識し過ぎているような気がしています。大阪は、東京と同じような「世界都市」を目指さず、違った争い方をすればよいのではないのでしょうか。先日、「なにわの海の時空館」で江戸時代の大阪のパノラマ展示を見ました。海辺に広がる田や畑や森、川沿いに整然と並ぶ家、滯つくしの間を行き交う船…。「日本のベニス」と思うほど素晴らしい景観でした。もし、このような景観を残していたなら、ユニバーサルスタジオが無くて、世界中から観光客を呼べたでしょう。当時の大阪は、住民と観光客の双方にメリットがあった街だったと思うんです。実は、本当の大阪の魅力というのは、土着にあるのではないのでしょうか。私は、「世界都市」ではなく、「土着都市」を目指すべきだと思います。

マリ まず、イベントとはどんなものかと考えた時、「野点箱 (のだてばこ)」のようなものをイメージします。自分の箱の中に、好きなものを入れて、どこかで広げて、小さなお茶会、つまり自分だけのイベントをする。こうしたものがイベントの原点だと思います。『アジアウィーク』という雑誌で、アジアの住みやすい都市のランキングを出していましたが、1位は福岡、2位が東京、大阪は4位です。福岡は、野点箱のようなイベントがたくさんあり、住宅環境もいい。都心部から空港が近いのも魅力です。大阪も、このような街を目指すことが重要でしょう。

井関 最近では、インターネットによって世界が一つになりました。この中では、国民国家が相対的に力を落と

し、それに代わって、都市が世界に発信するネットワークの結び目となります。それをふまえ、日本の未来を考えると、やはり東京、大阪、福岡が何を発信し、世界の中でどんな役割を担うかということが重要になります。大阪には、世界に向かって発信できる特色を持つ強い存在であって欲しい。また、近代産業社会では、与え手と受け手といった異質な立場が上下の関係をつくっていましたが、これからはそれらが再結合する時代です。例えば、企業と顧客、芸術創造者と鑑賞者、教師と学生、行政と市民が、再結合し、関係づくりをするわけです。この二つの流れを前提にして考えると、大阪は、どう異質なものと関わり、世界のネットワークの結節点になるのか、見えてくると思います。最近「21世紀のアトラクティブネス（魅力）とは何か？」という問いがあります。アトラクティブネスとは、人間にとって最も制限が強い希少な資源をどれだけ集められるか、ということです。一つは人びとの「時間」、もう一つは人びとの関心「アテンション」をどれだけつかまえられるかという問題です。つまり、これからは、大阪がどれだけ人びとの「タイム」と「アテンション」をつかめるかを考えることが必要です。それには、インターネットで、大阪についての情報を発信することも大切だと思います。



井関利明氏

やりたい人がやりたいことのできる環境づくり

谷口 それでは、大阪が「世界迎賓都市」になるには、具体的にどうすれば良いのでしょうか。そのあたりを討論していきたいと思います。

貴多野 これまで集客資産といえば、ホールや博物館といった固定的な有形の集客資産が中心でした。しかし、そんなものを一生懸命造っていても、やがて不良資産になります。それよりも、イベントやサーカス、移動美術館といった流動的な集客資産に注目すべきでしょう。また、もっと重要なのは固定的な無形の集客資産である住民です。私は住民が資産として人を集める力を持っていると考えます。

マリ 2000年4月から2001年4月まで、米国オレゴン州ポートランド市で自然をテーマにしたイベントが開かれています。これはもともと一人の女性がきっかけで始まりました。彼女は、街に空きスペースがたくさんあ

ることに気づき、ここに花を植えて、このスペースを市民に使ってもらおうと考えた。そこで、市から許可を得て、植物を見たり、触ったりできる小さなオープンスペースを街のあちこちに作りました。それが大きく膨らんで、他から人が集まって来るイベントに育ったのです。このように、新しいイベントを起こすために街の中からいろいろな人を引っ張り出すのではなく、やりたい人々がやりたいことをしやすい環境をつくれれば、仕掛けをしなくても自然に人を惹きつけるものが出来てくると思います。

谷口 新しく何かを建てるのではなく、今あるものを、意欲のある人に活かしてもらおうということですね。

井関 これまでは、イベントというと、お金を集めて大きなパビリオンをつくる博覧会のことになっていました。しかし、これからは、小さな集団のイベント、企業のイベント、自治体のイベントなど、住人と来訪者が一緒に創り上げる、日常の中のイベントを考えていく必要があるでしょう。例えば、ラスベガスは、今やギャンブルがセカンド・ビジネスになり、ショッピングやコンベンションテーマパークなどエンターテインメントが次々に生まれています。こうした施設は、ミラージュをつくったラスベガス仕掛け人の一人、スティーブ・ウィンに尋ねると、「世界中の人びとの心の中にある子ども」のために、素晴らしいホテルを造ったそうです。ラスベガスには過去がありません。元は砂漠ですが、さまざまな人びとが新しいものを未来に向かって創り出しました。大阪にも未来に向けた姿、世界の人びとに訴えるテーマがあるはずですよ。

谷口 ラスベガスは、ホテルに泊まっても非常に安い。また、マレーシアのショッピングカーニバルというイベントでは、開催中、電車やホテル、レストランが全部半値なんです。損して得とれという考えですね。こういうことを大阪でも実現すれば、大阪的な良さが出るのではないのでしょうか。日本は高コスト構造で、海外から来にくい国です。その上、何か催しがあるときに、「正月料金」などといって値段を上げます。しかし、大阪が半値でも儲けられる知恵を学習すれば、大阪だけ差別化



が図れるわけです。本当に来て欲しい時に、もてなす姿を分かりやすく表すことが大事だと思うんです。

マリ 去年、仕事でドバイに行ったのですが、ドバイはあと15年で石油が無くなることを想定し、シンガポールのような金融都市としての街づくりをしています。ちょうど3月は、大きなショッピングのイベントの時期でした。競馬の景品でメルセデスやBMW、ロールスロイスがもらえるのです。当たった人が外国人だったとすると、無料で国に送ってもらえる。ショッピングすると、どこでも必ず抽選券をくれます。夜9時になると抽選会があり、当たるとショッピング券をもらえます。このために、アジアやヨーロッパから、たくさんの人が来るのです。このようなイベントは、いくらでも考えられるような気がします。



マリ・クリステイヌ氏

目指すは、「劇場都市」「祝祭都市」

貴多野 私は、「大阪人はおもろおまっせ、集客する力がありまっせ」と、「人」を自慢するイベントを提唱したいですね。そのためには、人が出てくる舞台を作る必要があります。舞台の一つはストリートです。ミュンヘンオリンピックのときに街の中心地に大規模な散歩空間ができたように、ストリートが開放されて、「散歩都市大阪」となることが大切です。それから、これまで工業社会の中で、人は川に背を向けざるを得ないような産業を興してきました。これからは、川に顔を向けて生きられるような水辺空間をきちんと作る必要があると思います。3番目の舞台として、やはり御堂筋がカーニバルストリートのようなになればと思います。そうなれば、大阪は、市民がホストでありゲストである「劇場都市」「祝祭都市」になっていくと思うのですが。

井関 「劇場都市」というのは、素晴らしいコンセプトです。昔からビアッザやフォーラム、アゴラのような広場や街角から、新しい文化やスタイルが生み出されてきました。最近、U2のようなアイリッシュ・ミュージックが盛んになっていますが、彼らは元々はほとんどがダブリンのストリート・ミュージシャンなのです。ところが、日本でも人気があるエンヤという歌手は、ストリート・ミュージシャンでない、洗練された音楽創造者なので、本国ではさっぱり人気がない。世界的に有名でも、

ストリート生まれではないので、土着という感じではないんですね。私は、大阪のど根性を生かしながら、アイルランドのような祝祭の場、劇場広場を創っていただきたい。そして、インターネットで世界中に発信してほしいと思います。

橋爪 これまで大阪は大型のイベントを契機に都市の周辺を開発してきました。しかし、これからは既存の街を対象とした再開発型かつ市民参画型のイベントでなくてはなりません。私は大阪のど真ん中で生まれましたが、今はその土地が空洞化しガラガラです。その空いた場所を変えていくためにイベントは大切だと思います。ただ、ストリートや川をうまく使う提案も考えられています。行政との問題もあり、それほど進んでいません。行政側にもこうしたところを考えていただきたいですね。

谷口 食い倒れの大阪で、うまいものを掘り起こして、整理するような作業を始めてもいいかもしれません。路地でうまいものを作っている方はたくさんいます。そうした一つひとつのキラッと光る個性をきちっと発見し、それを磨く「時」を作ることがお祭りづくりだと思います。そういうものが結集して「劇場都市」を作れば、オリンピックを誘致するような大きな力になるのではないのでしょうか。

橋爪 欠けている部分に何らかの可能性を見いだすという考え方は、非常に大切だと思います。私が関わっているグループに、北海道の帯広で屋台村を計画している人がいます。帯広といえば、零下20度にもなる寒いところで、屋台でラーメンを食べたら湯気がそのまま凍ってしまうような場所です。普通はこんな場所に、屋台村なんてありえない思いがちですが、彼らは、帯広にしかない独自の屋台を作ろうとしています。大阪も、これまで緑が少なかったから花博をやった。またホスピタリティが十分じゃなかったからか、最近市長は「ハートフル」や「もてなし」という言葉を強調されるようになった。これまでの常識で考えると一見無謀にみえること、欠けていたと考えられる点にこそ、新しいことを始めるエネルギーと可能性があるのだと思います。

谷口 「小」が組み合わせられて「中」を形成し、それが積み上がって「大」になる。こういう力の結集があれば、大阪を魅力的な街に変えることができると思います。本日はどうもありがとうございました。



谷口正和氏



A会場

水の都・大阪 水は都市の命

- 塾長 森下 慶子 (株)ケービー 代表
- 講師 井関 利明 イベント学会副会長 / 千葉商科大学 教授
- 会場 イタリアンレストラン ベレンネ

「水の都」をテーマに集まった25人のメンバーたちは、細長いテーブルにぎっしりと詰め込まれた環境の中で、徐々に盛り上がっていきました。

「大阪人」という月刊誌を刊行しているグループの方々は、さすがに大阪文化や水の都についての歴史的知識も深く、一方では、水陸両用自動車を走らせてみたいという面白いプランを説く人のエネルギーが満ち、その横に河川管理をする人が座っていて…という、まともではないが、多様な大阪パワーを感じる会でした。

井関副会長の上手な挑発や木村会長の巡回も効いて、最後までにぎやかに交流が続きました。

残念だったのは、入口側と奥側では、話も聞き取れない上、自由に往き来するスペースもなく、自己紹介とコメント1回の一巡以上には、参加者間の交流がむつかしかった点。事前に自己紹介を含めた参加者リストを配布するとか、もう少しゆとりある空間にしたかった。次は、やり方を考えましょう。

その後、月間「大阪人」を送っていただき、大阪文化を楽しく勉強中の私です。

B会場

くいだおれの街・大阪 食は文化の担い手

- 塾長 北本 正孟 大阪大会実行委員長 / (株)カントリー 代表
- 講師 木村 尚三郎 イベント学会 会長 藤江 俊彦 淑徳大学教授
- 会場 チャイニーズレストラン 桃華

食いだおれの街、大阪。豊かで伝統的で、なおかつ新鮮なその大阪の味覚とは、いったい何でしょう。具体的な例をあげることは容易い、大阪寿司、カツネうどん、お好み焼き、たこ焼き、などなど。こうした大阪の食のまわりには、大阪ならではのこだわりと、もてなしの心とかたち、という文化があるからに他なりません。

大阪は、日本の食文化の中心地であり、先人たちが時代とともに作り上げてきた伝統の味が今も守られ、息づいています。そのうえ次々と新しい工夫を加えて、時流に応じて新しい味覚の暖簾をかがけていくところが、大阪なのかもしれません。大阪人特有の才覚が、絶えず働いています。

より広い視野から食関連産業を振興し、食の流通促進さらには食を通じた国内外の食文化の一層の向上を図る大阪。大阪の活気は食文化から…、と塾は盛り上がりました。

学会員と大阪市民が
“街づくり”を語る

どやねん 街塾

「イベントによって、21世紀の大阪はどのように進化していくのか?」。地元大阪の人々とイベント学会員が、IMPビル3階のレストランに集結。テーマ別に5会場に分かれ、「世界迎賓都市」大阪の未来について語り合った。

C会場

緑の街・大阪 都市環境をつくる緑

- 塾長 涌井 雅之 桐蔭学園桐蔭横浜大学 教授
- 講師 小松 史郎 (株)三菱総合研究所
- 会場 チャイニーズレストラン 桃華

当日の会場は運良く美味な中華。入りきれぬほどの塾員の方にお集まりいただきました。まず小松講師が「イベント動員量と緑の関係」について基調講演。次いで涌井が「大阪は沖積低地で平らであるがゆえ緑視率では不利。少ない緑を補うために緑をみどり(=緑+水面)とし、海と川から生まれた大阪独特のみどりの系を」等と長広舌。出席者の方々からは「色から街づくりを!」「勘定で考える大阪人にとって緑を増やす意味は定着するのか?」等々、活発な意見が出されました。会場内に潜んでいた大阪市オリンピック招致局長からは「中馬市長時代に市民の力で大阪城公園に苗木を植えるなど、かねてから大阪の緑を増やすのは一種の悲願」といったお話も。終業は、杯を手に乱入した木村会長から「緑・文化・美食そして歴史」の特別講義をいただきました。呵々大笑和やかな内、事務局の艱難辛苦の賜物である光のモニュメントを眺めつつ「もし招致に成功せずとも、そこで目標とした大阪の都市像を実現することこそイベントの本質」と締めくり、塾を閉じました。



D会場

笑顔が行きかう街・大阪 ホスピタリティーが人を招く

- 塾長 川口 直木 (株)京都デザイン研究所 代表
- 講師 篠崎 由紀子 (株)都市生活研究所 代表
間宮 聡夫 順天堂大学 教授
- 会場 スペイン料理 四匹の猫

「笑顔が行きかう街・大阪、ホスピタリティーが人を招く」と題したD会場の街塾は、参加者50人余。講師は順天堂大教授・間宮聡夫氏、地元大阪の都市生活研究所代表・篠崎由紀子氏、進行は川口塾長。大阪は集客都市、客を迎えるにはホスピタリティー、つまり「もてなし」。大阪のもてなしとは何か、オリンピックは大丈夫かという塾長の投げかけに講師が各々持論を展開。参加者も、イタリア在住20年以上というビジネスマンを始め観光専門家、介護研究の工学博士などがそれぞれの視点からマイクを握って大いに議論白熱。「もうかってまっかあ?!」という日常挨拶に象徴されるように大阪には他人が皆すぐ友達になれる外向的な明るさと人情があり、これこそが大阪のもてなし。そういう強烈な個性があるから外国との相互理解や交流は全く心配なし。オリンピック成功間違いなし! で意見一致。最後は大阪式手締めで大盛況のうちにお開き。宴会風どやねん街塾はまさに大阪そのものでした。



E会場

イベントの街・大阪 新しいイベントを創る街の活力

- 塾長 牧村 真史 (株)ブレン80 代表
- 講師 上野 征洋 静岡文化芸術大学 教授 増田 隆昭 淑徳大学 教授
- 会場 ワイン&レストラン PARK VIEW

1府1都3県から、自治体、民間企業、制作会社、フリーランナー、大学生と、老若男女・多士済々の顔触れにお集まりいただきました。「食べて、飲んで、喋って、聴いて、会費の元を取って」という塾長の挨拶とビールの乾杯でスタート。5テーブルに各講師が分散し、本塾テーマについてのミニスピーチ。参加者の自己紹介に併せ、「大都市のイベントが盛り上がらない。イベントなのに動員をかけなければ集客できないという現象が起きている」という問題提起がされました。その中で、上野氏は「魅力を磨くこと。イベントはメディアとして何を創り残せるかが重要」。また増田氏は「参加する側の視点で心と命=マインドを一緒に創りあげることが大切」と提言されました。最後は塾長が「情報と知恵をどう組み合わせるか、新しい価値を生み出す仕掛けがイベントである」と結びました。

ミレニアムファンタジー

12月15~25日、イベント学会大阪大会記念イベント「ミレニアムファンタジー」を開催。巨大な電飾ツリーが大阪城公園に設置され、大阪の夜を彩った。来場者は目標の20万人を大きく上回る50万3000人。大阪の冬の風物詩として定着させようという試み。



満天の星空を重ねたような巨大電飾ツリー

市民ライブバンドのステージも好評



交流懇談会

大会2日目の夜、「交流懇談会」を大阪城公園内の迎賓館にて開催。学会員と大会参加者は、大会の成功を祝うと共に交流を深めた。トランペットや和太鼓の演奏も会を盛り上げ、参加者の結束は高まった。



会場は終始にぎわい、新世紀の大阪の発展を予感させた



夜の大阪城に、和太鼓の荒ぶる鼓動が響いた

2001年度イベント学会研究大会・ 総会のお知らせ

- 問題意識**
- 20世紀から21世紀へ、という大きな時代の変わり目を重視する。
 - 世紀末の閉塞感から新しい時代へ、新しい切り口をブレイクする。
 - イベントは、21世紀の人間や社会のあり方をどう変革できるのか。

全体テーマ 「新世紀イベントを創造する」
～飛翔する21世紀イベント～

- 領域テーマ**
- ①福祉……………(例)ユニバーサルデザイン
 - ②環境……………(例)グラウンドワークス
 - ③コミュニティ…(例)祭り
 - ④スポーツ…………(例)コミュニティ・スポーツ
 - ⑤その他……………上記①～④以外のテーマ

日時・場所 2001年6月22日(金)10時～19時(発表者数で多少前後する)
東京都文京区本郷2-1-1 順天堂大学 御茶の水校 有山記念館

- プログラム**
- ①基調講演(井関利明/イベント学会副会長・千葉商科大学教授)
 - ②研究発表(1件につき発表時間25分、質疑応答10分を予定)
 - ③シンポジウム(コーディネーター・間宮聰夫/順天堂大学教授)
 - ④2001年度総会(約30分)
 - ⑤懇親会(60分)

- 発表申込み**
- ①発表を希望される方は、発表申込書にご記入の上、5月7日(月)までにイベント学会事務局あてにご提出下さい。
 - ②発表内容や方法が、研究大会の趣旨にそぐわない場合や、準備の都合上対処しかねる場合は、お断りすることがあります。

参加登録 会員には5月20日頃、プログラム内容をお知らせし、5月末までに参加登録費を添えて参加登録をして頂きます。

参加登録費 参加者1名につき、個人会員・自治体会員・法人会員は5千円、準会員は1千円、非会員は1万円。

著書寄贈

下記の会員より、著書を寄贈して頂きました。

- ◇平野繁臣/ (株)現代芸術研究所会長 『国際博覧会歴史事典』内山工房(TEL:03-3778-9225)1999年・3500円
- ◇貴多野乃武次/ 阪南大学教授 『ファンタジー・シティ ラスベガス7つの法則』APS(TEL:0798-66-7169)2000年・952円
- 『集客の法則』APS 1999年・952円
- 『集客都市』APS 1998年・952円
- 『集客』遊時創造社 1997年・952円
- 『遊園地のマーケティング』遊時創造社 1995年・800円

皆様が発表された
イベント関係の著書、論文を
イベント学会事務局に
御寄贈下さい

イベント学会入会のご案内

本学会は、事業として、①イベントに関する理論的研究・実証的調査研究 ②新しいイベント技法の研究・開発 ③イベント関連学術情報収集・研究発表・発刊 ④イベント研究団体・研究者の交流・協力を行ないます。

入会を希望される方は資料を下記の事務局にご請求下さい。なお、会費は次のとおりです。

	(1)入会金(円)	(2)年会費(円)
個人会員	5,000	10,000
準会員(学生・院生など)	-	2,000
自治体会員	20,000	50,000
法人会員(1口)	100,000	100,000

シンボルマーク制作の言葉



JAPAN INSTITUTE OF EVENTOLOGY
イベント学会

未来につながる言葉として、デザインとイベントがあると思う。デザインは精神性が強い言葉だ。イベントは肉体的性が強い。この二つの言葉を合体させると新しい動きが出てくる。Eの字の中央線にマッチで点火した瞬間を表現した。イベント学会が爆発を起こす。

アートディレクター 浅葉克己

浅葉克己デザイン室主宰。東京ADC委員、JAGDA理事、東京TDC会長。1940年生まれ。日清食品、西武百貨店、サントリーなどの広告を多数手掛け、日本の広告界をリードする。

EVENTOLOGY No.7/2001.Feb. ■発行人/木村尚三郎 ■編集人/藤江俊彦 ■発行日/2001年2月
■発行所/イベント学会事務局 〒102-0082 東京都千代田区一番町13(一番町法眼ビル1F)
TEL(03)5215-1680 FAX(03)5215-1716